

臨床心理士試験対策授業研修レポート

東京福祉大学特任教授
社会福祉学修士 安齋多香子

このたび、臨床心理士試験対策授業にて試験対策授業方法の研修に参加する機会を得たので、わかったことを中心に述べる。

毎年実施されている臨床心理士の試験は、例年全受験者のうち約6割強の受験生が合格する心理学系の重要な資格である。本学で大学院に心理学研究科を設置して後、2006年から大学院修士課程卒業生が受験しているが、受験対策を始めた当初は対策方法がわからず困っていたところを、教育学博士である中島総長先生が直接担当の心理学系の教員の先生方に対策授業の進め方・方法を指導され、7割を超える合格率になったと記憶している。

ところが、この数年、ひどい時には32パーセント、22パーセントの合格率が続き一桁の合格者しか出せていなかった。教員の力不足で学生に申し訳ない限りであり、また、合格できない大学院では大学としても死活問題である。

本学にはキャリア支援科目、つまり国家試験や公務員試験の対策授業が資格課程ごとに開設されているが、やはり、今回、久しぶりに中島総長先生が直接当日の授業担当教員にサジェスションを与えながら授業が展開されるのを見学して、効果的な対策授業、イコール、学生が合格できる授業はどうあるべきかについて深く考えさせられた。

当日の授業開始当初、ありがちではあるが担当教員は、いちいち前置きをしたり漠然とした不必要な解説をしゃべるためなんだかよくわからない授業展開となり、逆にここがポイントで重要項目の簡単で分かりやすい説明にはならず、また、学生に授業中に暗記させる時間もとらずに進めていた。試験対策授業としては極めて不適切である。何故なら、学生がその対策授業中に頭の中が整理できるように、教員は重要ポイントに下線を引かせるなどして明確にし、本当に必要な解説のみ行い、その場で学生が本当によく理解して暗記するところまで持っていくことが合格への近道で望まれる授業であるからである。

また、この対策授業時間で問題を解くのも試験をするのも学生の力を試すものではなく、学生が安心して授業に臨み、自信をつけることが大切であるとのご指導があった。それは、受験に対して少なからず不安を持っている学生に、解答やその解説文を先に見せながら問題を解かせることは、その授業が終わった段階で、できる学生にしていくことになり、最終的に臨床心理士試験に合格するという目的を達成するために極めて効果的である。

教員はこれでもかというほど解説をしたがり、また、学生もそれを聞くと教わってよかった、勉強した

というように錯覚するが、現実には重要ポイントのみ抑えて過去問を解けるように暗記することこそが合格への近道であると再確認した。

さらに、小論文試験課題に臨む方法について総長先生が担当教員にご教示されていたが、課題に対する回答の小論文を最初から書かせて添削するのでは学生には難しく効果的ではなく、教員が前もって課題に対する解答例を3本くらい作成しておき、まず、それを学生が読んで、小グループなどでディスカッションして理解を深めポイントを確認し、そのうえで学生が個々に自分なりの捉え方で文章をまとめれば、課題に対して対応した小論文を書くことができ力が付くということであった。これは、論文指導として素晴らしい方法であると感嘆した。一般的に教員は添削指導をすることに熱心になりがちであるが、そうではなく、学生に基本的な重要ポイントを理解させ、論点等をどうまとめさせるかということが重要なのである。

このように、今回の総長先生による対策授業では、学生に「こうすれば必ず合格する」と何度も教員に自信をもって言うようにご指導があったが、その通りである。学生は試験に合格するために対策授業を受けているのであるから。

学生にどう学ばせれば受かるのか。今回ご指導いただいた内容の本質をよく理解して、担当教員の先生方が授業の事前準備をよく行って、学生が合格できる授業を実施していただきたいと考える。